



共産主義と宗教：ベルチャエフの所説について

著者	久山 康
雑誌名	人文論究
巻	5
号	3
ページ	11-34
発行年	1954-09-20
URL	http://hdl.handle.net/10236/4367

共産主義と宗教

——ベルデアエフの所説について——

久山 康

「キリスト教とマルキシズムの争こそ、現代の生死を賭する係争問題である。それは例えは、社会主義と資本主義のごとき互に競いあう経済組織間の争でもなく、議會主義とファシズムのごとき政治的理想の競争から来る争でもない。それは人間と社会の本質そのものに関する二つの對立的な哲學、二つの對立的な教理間の争である。」ドウソンは「宗教と近代國家」の中で、このように記している。ドウソンは「キリスト教とマルキシズムの争」という言葉を敷衍して、「カトリック教會と共産主義政黨との争」という言葉を挿入しているのであるから、キリスト教といつても自己の所屬するカトリシズムのことのみを考えていることは明かである。そして無数に分派して統一的な現實勢力としては無力であり、統一的な世界觀の獨立という點でも遜色のあるプロテスタンティズムや、歐米の支配的な民族の中に地盤をもたぬギリシヤ正教が、カトリック學者であるドウソンによつて看過されたことも自然であろう。そしてそのことは逆にマルクス主義者がキリスト教のことを考える場合、カトリシズムを當面の對象とすることとも對應している。例えはフランスのルフェーヴルは、今日提示されている主要な世界觀は、三つであり、且つまたそれに止ることを主張して、カトリシズムと個人主義的世界觀とマルクス主義をあげ、そして現代における個人主義的世界觀の崩壊を説いて、少くともフランスにおいては、あとに残つて向き合つてゐるのは、カトリシズムとマルクス主義である

ことを述べている。⁽¹⁾しかし、このようなカトリシズムの一方的な評價に對しては、たとえ、ドストイェフスキイが「白痴」以來行つてきたような、カトリシズムがキリスト教の歪曲であり、それは一見したところ對蹠的にみえる無神論的社會主義の源泉をなすものであるとの批判も存在するし、戦後西歐の世界で支配的な政治的勢力にまで具體化したながら、その保守的な態度のゆえに、すでに歴史の批判に堪えかねるような姿を顯わにしつつあるカトリシズムの現狀でもあつてみれば、ドウソンやルフェーヴルの考へに據に賛同することはできないけれども、キリスト教の現狀はいかにもあれ、キリスト教思想そのものがマルキシズムと最後の對立拮抗すべき唯一の思想であることについては、恐らく誰も異論を有しないであらう。そしてこのキリスト教とマルキシズムの對決について考察する場合、ロニアの生んだ偉大な宗教思想家ニコライ・ベルディアエフのマルキシズム批判は看過することができないであらう。われわれはいまそれについて考究してみたいと思ふのであるが、先ずその生涯の一瞥から始めたい。

周知のようにベルディアエフは、一八七四年キエフの貴族の家に生れ、長じて士官學校からさらにキエフ大學に學んだ。學生時代からマルキシズムの影響を受け、一九〇〇年廿五歳のときにはマルクス主義者として政府に反對したため、三年間ロシアの北邊の地に流刑に處せられた。しかし「わたくしは唯物論者であつたことはなく、自分がマルクス主義者であつた時代にも、哲學の上では理想主義者であつたことはなく、自分の哲學上の理想主義を社會問題におけるマルキシズムと結合しようとした。わたくしは唯物史觀における多くの主張の正しいことを認めながらも、わたくしの社會主義を理想主義的基礎の上に築きあげた」と、自らも記しているように、かれのマルキシズム信奉には、初めから根本的な制約がついていたのである。しかしこの愛嬌の社會運動の中には、「わたくしは哲學者として、世界を認識することだけを望んでいたのではない。わたくしの場合、世界を知らうという要求は、いつもこれを變革したという要求を伴つた」と言い、「激動する歴史の時期、精神的な變遷の時代に、安樂椅子の哲學者、机上學問の人間としてとどまりえない哲學者は、精神的な闘争に参加しないわけにはゆかないのである」と述べた、⁽²⁾かれの直學な

人生態度がこもつていたことはいうまでもない。かれの記した次の言葉は、かれの思想態度の根本的な性格を最もよく語るものである。「わたくしはアカデミックなタイプの哲學者では決してなかつたし、哲學が抽象的な、生活から離れたものでなければならぬなどと願つたことは嘗てない。わたくしはいつも随分讀んでいたが、書物はわたくしの思想の起源ではなかつた。事實いかなる種類の書物にしろ、これをわたくし自身が生きぬいてゐる體驗と結び合わせることなしには、理解しえたためしがない。それどころか、わたくしは眞正な哲學は常に闘争であつたと考へてゐる。プラトン、プロティノス、デカルト、スピノザ、カント、フイヒテ、ヘーゲルの哲學はそうした部類のものであつた。わたくしの思想は常に實存的なタイプの哲學に歸してゐる。わたくしの思想に見出されるはずの矛盾、撞着は、精神的闘争、實存そのものの正に核心に存する矛盾の發現であつて、論理的統一の表面によつて偽裝されてはならない。思想の眞の整合といふものは、人格の整合と結びつくものであつて、それは實存的な統一であり、論理的な統一ではない」と。

さてかれは流刑後、ハイデルベルグに赴いて暫し哲學の研究を行つた後歸國した。ところが廿世紀の初頭において、かれの言うごとく、ロシアのマルキシズムは分毀した。一方で教養のあるマルクス主義者は精神的危機を経験して、理想主義的な宗教運動の創始者となり、他方で大多數のマルクス主義者は共産主義の到来を準備し始めたのである。そしてこの新しい宗教的な運動は、ドストイエフスキイやソロヴィエフに源を發するものであるが、ベルデアエフもその代表的な指導者の一人となつたのである。この新しい轉向の經過についてかれは次のように述べてゐる。「一九〇七年、わたくしは一文を草して、ポルシェヴィキが革命運動に必ず勝利を収めるであらうと豫言した。當時わたくしはドストエフスキイの『大審問官物語』に深く沈潜してゐたが、これがわたくしの内面に行われていた精神的闘争に甚大な影響を及ぼすこととなつた。わたくしはキリスト者としての立場をとりつゝ、『大審問官物語』におけるキリストの姿をうけ容れたと言へるであらう。わたくしはキリストに向つた。そしてわたくしのキリスト教のう

ちにあつて、わたくしは『大審問官』の精神に歸せられうるすべてのものに對置された。しかしわたくしはこの『大審問官』の精神が左右兩翼から表明されて、權力的な宗教と政治のうち、また權力的な革命的社會主義のうち、共にあらわれているのを見てとつた。人間の問題、自由の問題、創造性の問題が、わたくしの哲學の根本問題となつてきた。『創造性の意味』(一九一六)というわたくしの著書は『襲撃と殴打』であり、このうちで生に對するわたくしの獨立的な哲學的展望を表現した」と。このようにしてかれの生涯の思想の根幹は形成された。そしてかれの思想の戦いは二つの方向にむかつて行われることとなつたのである。かれはそれをこのように表現している。「社會生活に關するわたくしの思惟に含まれている根本的な矛盾は、わたくしの内部に二つの要素が並んで存在することと結び合つている。——すなわち、人格と自由と創造に關する貴族主義的な解釋と、各人の尊嚴、最もとるに足りない人間の尊嚴さえも主張し、生活におけるかれの權利を保證せよという社會主義的な要求とである。それは高き世界に對する熱烈な愛、至高なものに對する愛が、このより低き世界、苦惱の世界に對する憐憫と衝突することである。この矛盾は長年に亘るものである。わたくしはニイチュとレオ・トルストイとに同時に近く立つてゐる。わたくしはカール・マルクスを甚だ高く評價するが、またJ・D・メーヌストルとE・レオンティエフを重くみる。わたくしはヤコブ・ペーターに對して親近性と愛を感じるが、またカントに親近性を感じてゐる。一切を水平化する暴政が人格の尊嚴に關するわたくしの理解、自由と創造とに對するわたくしの愛を損うとき、いつでもわたくしはそれに反抗し、わたくしの抗議を最も極端な形において表明する。しかし社會的不平等の擁護者たちが厚顔にも自己の特權を擁護するとき、——資本主義が勞働大衆を壓迫し、人間を物に變ずるとき、わたくしはまた反抗する。この二つの場合において、わたくしは現代世界の根柢を拒否する」と。

このかれの反抗は、かれがマルキシズムの陣營に身を投じたとき、その一面を顯わしたのであるが、いまやマルキシズム自体に對決することによつて、その他の一面を明かにしたのである。そしてかれが新しい理想主義的宗教運

動に参加してロシア正教會と深い精神的運關を有つに至つたときにも、このかれの反抗は、政治的勢力に操られて腐敗の極に達していた正教會に對して發動して、一九一四年にはシベリヤ流刑の宣告さへ受けようとしたのである。しかしやがてロシアの政治的状況は急變して一九一七年の十月革命が勃發した。これに對してもかれは悲劇的な拒否の態度を取らざるを取らざるをえなかつた。それについてかれは後年、「わたくしは革命が不可避であり、正當であると思つた。しかしその精神的な側面は、そもそも初めからわたくしの性に合わないものであつた。その卑劣な側面、精神の自由に對する侵害は、人格についてのわたくしの貴族主義的解釋と精神的自由の崇拜に矛盾した。わたくしがボルシェヴィキ革命を受け容れることを拒んだのは、社會的な理由よりも、むしろ精神的理由からであつた」と記している。革命の後かれは暫くモスクワ大學の哲學教授となつたけれども、その反共產主義的宗教思想は革命政府と相容れる筈もなく、二度の投獄の難に逢つた後、遂に一九二二年幾多の學者や著述家とともに國外に追放された。かれは二年間ベルリンで宗教哲學アカデミーを主宰した後、パリに移つて多彩豊富な思想活動を展開し、秀れた多くの書物を著して、獨自のキリスト教的歴史哲學に立つ銳利卓拔な近代精神の批評家、また新しい時代の宗教思想家として世界の注目を受けた。かれは西歐の世界に移つてからは、ブルジョア資本主義社會に反撥して、青年時代の社會主義の眞理に立ち還つたが、しかしそれは自ら「人格的社會主義」と呼ぶ立場においてであつた。しかしかれが一九四八年パリに客死するまで、かれの心を絶えず傷ましめたのは、祖國ロシアの運命であり、かれの思索は共產主義とロシア革命の理解と批判を一つの中心として旋回して死に至つたのである。従つてかれのマルクス主義の理解と批判には、生々しい經驗を通してえられた深い洞察と、血の逆るような情熱とがこめられている。かれわれはいまかれの思索のあとを、數多くのかれの書物の中から、特に「マルクス主義と宗教」(一九三一年富崎館憲民譯)、「共產主義の眞理と虚偽」(Wahrheit und Lüge des Kommunismus 1935)及び「精神の國とターゲルの國」(Das Reich des Geistes und das Reich des Caesar, 1948)を中心として考察してみたいと思つた。

- (註) ドウンソン・深瀬基寛譯「宗教と近代國家」一二五頁
 (二) ルフェーヴル・竹内真知譯「マルクス主義」一六頁―二二頁
 (三) Berdyayev, *Slavery and Freedom*, p. 13 西田信同 p. 7 中尾 p. 15, 16 (四) 同 p. 9 (五) 同 p. 16

二

われわれは先ず「共産主義の眞理と虚偽」の「根源と本質」においてベルヂアエフの述べた問題の分析と提起から考察しよう。

現代において共産主義に對する立場は、知的な原因によつてよりもむしろ感情的な原因によつて規定されている。心理的な象徴衝動というものは、共産主義の理念の世界を理解するのに都合の悪い状態となつてゐる。すなわち、ロシアの亡命者にあつては、共産主義は情熱的な魂の反動を呼び起す。また西歐においては、脅かされたブルジョアの感情的な反動か、それとも皮相な流行を追う知識人達のソ聯への友和によつて規定されている。それでは一體誰が現代において共産主義のイデオロギーを、共産主義信仰を、眞剣に考慮するのであらうか。

「社會主義の虚偽を克服するためには、人は社會主義の眞理を承認しなければならない」と、嘗て十九世紀のロシアの卓越せる哲學者ウラディミル・ソロヴィエフは述べたが、この言葉をわれわれは社會主義の一つの極端な形である共産主義にも適用しなければならぬ。共産主義はただ一つの大きな反キリスト教的虚偽と同時に、しかしまた多くの眞理を有している。この虚偽はしかし非常に力の強いものである、それは共産主義のあらゆる眞理に打ち克ちこれを歪めるのである。キリスト者にとつて共産主義は全く特性な意味を有している。それはキリスト教の罪の正體を顯わらし、實現されなかつたキリスト教の課題と義務とを督促するのである。キリスト教の眞理が人生の只中で自己を實現することができなかつたので、悪しき力がキリスト教の眞理の實現を企てるのである。そこにすべてのヨ-

ロツパの革命的な意味があり、そこにおいて革命の神秘的なダイアレクティクが顯わとなるのである。キリスト教の眞理は、因襲的で辯論術的となり、無力となつた。キリスト教の人々は、キリスト教の眞理を宣べ傳へることに自己の働きを限定して、それを實現することを中止した。それゆゑこの眞理の個々の要素の實現は、キリスト教に對する情熱的な反動において完うされるのである。幾世紀も昔からキリスト教の世界は、内面的な二元論に最も深く貫かれてゐる。キリスト者は二つのリズムの中で生活してゐる。すなわち、かれらの生活の大部分のみが宗教的で教會的であり、規定されてゐるので、殆どかれらの全生活はこの世的で非宗教的なリズムの中で行われてゐるのである。キリスト者の生活の大部分は、キリスト教的な眞理によつて聖化されるせず、榮化されるしないで止つてゐる。ことに全然正當とも認められず、不透明のままに止つてゐるのは、經濟的社會的な生活であつて、それはそれ自身の法則に委ねられてゐるのである。

マルクスが、資本主義の世界は無政府状態の産物であると言つたのは正しい。資本主義の世界にあつては、全體の生活は、經濟的な私利の追求によつて規定されており、それ以上の目的に従つてゐない。従つてキリスト教の精神に資本主義社會の精神ほど矛盾するものはない。資本主義の時代が、キリスト教の頹落とキリスト教的精神性の弱化和一致してゐるということは、決して偶然ではない。

今日すべての宗教と教會とを壓迫し迫害してゐる共產主義の理念は、宗教的であり、また或る意味ではキリスト教的起源を有つものである。共產主義はいつも唯物論と無神論を信奉するというわけではない。過去においてはそれは宗教的で唯神論的色彩を有してゐた。われわれの忘れてならないことは、共產主義的理想國家を企てた最初の共產主義者は、外ならぬプラトンであつたこと、そして原始キリスト教の時代には福音に基くキリスト教的共產主義の存在したること、さらに中世や宗教改革の時代には共產主義が突然出現したこと、そして『ユートピア』の著者であるトマス・モアはカトリック教會によつて視瀆の高座に加えられたこと、最後に十九世紀初葉のフランスにおける共產主義的

社會主義的潮流は、たとえはつきりせぬ不明瞭な性格であつても、唯神論的宗教的性情を有していたことである。

共產主義という言葉は *Communio* すなわち、共同という言葉に發している。 *Communio* すなわち、この相互の共同、この人間の精神的な一致は、生命の最高の源泉、すなわち、神との共同を前提としている。神において、そしてキリストにおいて人間の共同は、眞の *Communio* は達成される。兄弟のごとき親しさは唯一なる神の許においてのみ可能である。成程、現代の共產主義者は一般的な共同性を社會の機械的な強制組織の道によつて達成しようとするが、 *Communio* の理念、人間の共同の理念、すなわち、言葉の深い意味での共產主義の理念は、やはり人間の魂の中に大いなる憧憬として、そしてまた永遠の夢として生き残つているのである。

唯物論的な共產主義がキリスト教的な共產主義よりも實現が容易であることは、われわれの存在の悲劇性を示すものである。唯物論的共產主義は人間の精神的自由と罪性に苦しむことなしに、権力と壓迫とを使用することができ。このような方法では精神的な共同は打ち建てられないが、社會の新しい生活秩序は實現されるのである。キリスト教はしかし精神の自由を承認している。従つて社會の強制的な組織化を眞實と思うこともできないし、その實現に着手することもできない。嘗てキリスト教は神政政治の形式の下に社會を形成しようと試みたことがある。そのとき人間の自由が忘却され見誤られていたので、そのためにそのやつたことは虚しいものとなつた。

キリスト教は人間の人格の常恒なる價值を信じており、人格を卑しめたり否定したりするような社會形式を實現することはできない。唯物論的共產主義は人間の人格の價值も意義も否定する。従つて非人格的集合を組織化するといふ非人間的課題を實現することができるのである。

共產主義者は、キリスト教が自己の眞理を實現することもできないし、また人間を災禍や苦惱から全然解放することもできないといつて、キリスト教を非難する。この非難はキリスト教の眞理を實現する際の決定的な前提に對して盲目なのである。共產主義者は人間の精神の自由を看過している。それは生活秩序の外面的で機械的な實現や罪の強

制的な根絶とは一致することのできないものである。しかしながらキリスト者に對するその非難は、この指示によつて反駁されるものではない。社會的な領域で纏むとなつてゐる罪は克服されなければならぬ。キリスト者はキリストの精神において社會の變形を自己の課題として把握し、それを全力をつくして實現するように試みなければならぬ。

人間の本性のもつ罪性は、人間の社會の變形や改善を、すなわち、より大いなる社會正義の實現を、本來虚しいものにするに違ひないのだとする虚偽と偽善とは、かの保守的でブルジョア的なキリスト教の言ひ分である。人間社會の變形と改善のための活潑な働きを要求しているのは、人間の本性の樂天的な見解、すなわち、素朴なルソー主義ではない。素朴なルソー主義は實は樂天主義と個人の利益の自然的な調和への信仰を伴つたブルジョア的なイデオロギイであつて、このイデオロギイがすべての不正とともに資本主義を生み出したものである。しかしわれわれは、人間の本性をその罪性において認識しその意味で厭世主義者であるわれわれは、罪の社會的な現象形態を制限し、これと闘ふことのできる人生の秩序を要求する。共產主義は、恐らく世界共產主義もまた、自らを可能な實現されうるものとして證することができる。それは人間の本性が罪なきものではなく、むしろ罪に纏われているそのためである。真理がこの課題を断念するならば、社會は罪のエネルギーによつて改變されるであらう。

ユートピアは今日一般に信ぜられてゐるよりも早く實現されるであらう。それは罪の力によつて實現されることができぬ、空語となつた「善」と、腐敗した「善」とに負わされるのである。神のない禍なる形態をとつた共產主義は、このキリスト教的社會の生み出した事實であるが、しかしそれは同時にこの社會に下される審判でもある。神のない共產主義の眞理は、墮落せるキリスト教世界の虚偽に對する反抗の中に存在してゐる。従つて共產主義の眞理をその虚偽より區別することは非常に困難なのである。

もし共產主義を専ら政治的事實として把握し、政治的經濟的理論の立場からの合理主義的批判の下に置こうとするならば、萬事は理解されぬままに止るであらう。共產主義は、理論としても實踐としても、單に社會的現象であるばかりでなく、同時に精神的で宗教的な現象でもあるのである。共產主義の最も深い危険は、その宗教的意義の中にある。社會的體系としては、共產主義は宗教的に不偏不黨の立場に止ることができぬが、一種の宗教としては、キリスト教に對立するものであり、キリスト教を壓迫してこれに取つて代らうと努力している。

宗教に似て共產主義は全體的な世界把握をもたらし、人生のすべての根本問題を解き、人間の現存在に意味を賦與し、一つの教義學を告知し、教義學的倫理を教え、自己の教理問答書を公けにし、禮拜を完成し始めている。共產主義は人間の全精神を支配し、そこに熱中と自己獻身への意志を喚起する。多くの政黨と異つて共產主義は決して世俗化され全體的な人生觀から齟齬した政治というものを承認しない。共產主義の超人的な活動力において、われわれはいわば何千年となき宗教的過程の中で人間の魂に貯えられたエネルギーの轉用されるのに出逢うのである。共產主義の神のない反キリスト教的理念への奉仕は、宗教的精神的エネルギーによつて擔われている。もし萬一共產主義が反宗教的な宣傳によつて、宗教的感情と信仰とをそして信仰の名における獻身とを究極的に抹殺することに成功でもしようものなら、共產主義はそれによつて自己の生存を全く破壊するであらう。すなわち、共產主義の信奉者の獻身は消えて去るであらう。しかるにこのようにして魂のキリスト教的構成は、すなわち、信仰と犠牲とのキリスト教的能力は、反キリスト教的理念の實現という名の下に、無神論の告知者によつて利用され濫用されているのである。

誠に残念なことであるが、ブルジョア時代のキリスト者はそのエネルギーと獻身において共產主義者に劣ることを承認せざるをえない。偉大なる聖者やキリスト教の戰士の形成は過去の語り草となつてしまつた。現代においてキリスト教は頹落の時代を體驗したのであり、それによつて共產主義の成果を準備したのであつた。ソヴィエットの青年の誠直な我を忘れた共產主義への獻身は、いかなる手段をもつてしても蔽ふことのできぬ争うべからざる事實であ

る。それはロシアの青年が五ヶ年計畫の實現のために働いたときのあのエネルギーにおいて明白である。

理論的立脚點よりするならば、共産主義はマルキシズムの遺産を相續したものである。マルキシズムは共産黨の義務的な象徴の意義を形造つてゐる。しかし人は、共産主義の理念に對する獻身をマルキシズムの魔術の成具として、すなわち、西歐においても知れわたつてゐるあの同じマルキシズムへの忠誠として、把握することが出来るであらうか。われわれはこのマルキシズムの上にドイツの社會民主黨が立つてあり、そこには少しの熱中も獻身も見られないことを知つてゐる。社會民主黨は勤勉で中庸をえた政治の方向をとつていて、すべて熱狂とか宗教的な運動に類似したものは少しも所有してゐない。ロシアの共産主義の複雑性とその把握の困難さは、それが一面では國際的な現象でありながら、他面では純粹にロシア的な問題であることより來てゐる。マルキシズムの合理主義的な學說とその非合理な要素とは、ここでロシアの非合理な原始エネルギーにおいて光線の屈折を経験した。そしてロシア精神との邂逅によつて改鑄されたのである。

革命は非合理な原始的力によつて生み出されるのであり、國民の魂の暗い意識下から立ち現われてくるものである。しかし同時に革命はまた、生活の合理化の課題を掲げるのが常であり、戦いの世間的な象徴の意義をもつ合理的な學說を徵表として遂行されるのである。かくしてフランス革命は、たとえデモニーニツシな非合理的力によつて擔われたものであつたとしても、十八世紀の啓蒙主義の哲學を崇拜したのである。

ロシア革命は人生の極端な合理化に——すべての神秘とこの上なく小さなすべての非合理な要素の除去にまでも——努力した。しかし同時にその中で、すべての合理的な學說を深淵の象徴に變えてしまふ非合理でデモニーニツシな原始エネルギーの高潮が見られるのである。マルキシズムの合理的で客觀的學問的な要素ではなくて、マルキシズムの神話を形造るような宗教的な力がロシアの共産主義の中には生動してゐる。ロシア革命の合理的要素と非合理的要素との獨特な融合の仕方は、共産主義とボルシェヴィズムとの間の差異についてあの言い傳へるの形成を——それ

は國民の間に、すなわち、農民や勞働者や小市民の間にあまねく擴つていつたのであるが——促したのである。ボルシェヴィズムは純粹にロシア的民族な現象として、狂暴な無政府的なロシアの國民革命の突發として把握される。共産主義はロシア革命を合理的な組織化の鎖につないだ外來の力と考えられるのである。この用語の上での相違にロシア革命の合理的要素と非合理的要素の相違が對應するのである。

革命の理念は常に合理的な要素を有している。この要素をロシア革命はマルキシズムから借り受けたのである。しかしどこにロシア革命の非合理的なエネルギーを響應する源があるのであるか。一體マルキシズムの中には國民大衆を強力で繼續的な革命運動に高め且つ熱中させることのできるようなないかなる力が含まれているのであろうか。

ベルデアエフはこのように問うて、共産主義の現状分析とその問題點の探求を終り、續いて「宗教的メシアニズムとしてのマルキシズム」という項目において、強力な革命運動の源泉である共産主義の思想構成についてかれの所見を述べている。われわれはそれをさらに考察しよう。

三

一體、マルキシズムは經濟的歴史的な唯物論の理論に基いている。この學說によれば、歴史的社會的な生活は經濟的な前提によつて、物質的な生産力と生産と交換の形式によつて規定されるものと考えられる。經濟的領域は生活の「基礎」であり、その唯一の眞實な原本的現實である。すべての他のもの、精神生活、宗教的見解、哲學、道德、藝術、すなわち、文化一般は「イデオロギー」であり「上部構造」であり、現實の經濟的過程と社會的關係の人間の意識における偽られたそして歪められた反映である。

經濟の絶大なる意義は、すでにマルクス以前に歴史家や社會主義的夢想家達によつて、就中多くの點でマルクスの先驅となつたサン・シモンによつて強調された。マルクスはしかしこの確定に世界的形而上學的な性格を與えたので

ある。この経済的な形而上學、すなわち、経済的な過程を原本的現實としまた存在の本質とする學說を、マルクスは階級闘争の學說と——これはマルクスの崇拜者からかれの天才的な「發見」或はもつと正確にいうなら「啓示」と認められたものであるが——結合した。階級闘争についてもまたマルクス以前に控え目な歴史學が語つてゐる。然るにマルクスはプロレタリアのメンアの任務についての學說を告示したのである。

經濟的唯物論の學說は何人をも感激させることはできないであらう。人間の全生活が經濟的過程によつて決定されてゐるということは、人間のすべての活動性を刺戟するよりもむしろ麻痺させる本來極めて悲しむべき見解である。マルクスはしかし全然この悲しむべき眞理に止りはしなかつた。成程かれは過去を陰鬱な光の下に見たけれども、未來はかれにとつて最も明るい色調で輝いていたのである。マルクスとエンゲルスは必然の國から自由の國への飛躍を説いた。過去においては必然性が、すなわち、經濟的な力による人間實存の絶對的な被決定性が支配してゐた。しかし未來は自由の國に屬してゐる。社會的理性は自然と社會の非合理な元素の力に究極的勝利を博するであらう。そして社會的人間は宇宙に對する強力な支配者の榮位をうるであらうと。

マルクスはかれ自身の唯物論との甚しい矛盾を犯しながら、ヘーゲルの遺産である辯證法を信じた。辯證法は想を通つて善に、無意味を通つて意味の勝利に導くべきものである。ヘーゲルにあつては辯證法は汎論理主義と不可分のものであつた。ロゴスが、意味が、それにおいて自己の勝利を主張したのである。世界の生成過程は、ヘーゲルにおいては辯證法的性格を有してゐる。なぜならそれは辯證法的過程であり、概念の自己啓示だからである。個々の領域の辯證法はロゴスを搖える萬有の懷embraceより出るその根源の辯證法である。汎論理主義的辯證法を唯物論の中に移し入れようとするあらゆる試みは、元來難破するように判定づけられてゐるのである。なぜなら物質はロゴスをも意味をも知らないからである。しかもなほマルクスは唯物辯證法を主張した。マルクスは、物質的經濟的過程は正反對に對立する力の戦いによつて、意味の、理性の、ロゴスの勝利に、すなわち、自由と秩序の國に導き、自然の非合理

な元素の根元力によつて生み出される必然性を克服するに違いないと信じていた。この信仰は狂想である。一體なぜ物質的經濟的過程は、究極的な無意味さの勝利に、奴隸状態と無政府状態に導かないのかということば、全く理解されないままに止つてゐる。この過程はそれ自身非合理的な自然であり、理性のいかなる勝利をも保證することはできない。マルクスはしかし未來の完全なる共產社會の幻に憑かれていた。そこではあらゆる非合理と不正とが根絶され、生活は究極的に合理化され、汎論理主義は勝利を収め、つまり理性と正義と秩序とが形をとつて現われる生活形式が始まると考えられたのである。マルクスにおいてわれわれは、對立する精神的現象の注目すべき結合を見出すのである。一方では、デモニーニッシュで非合理で相互に矛盾する歴史的エネルギーによつて行われる激烈な戦いの強度の感覺と明確な意識を、かれは有している。しかし他方では、理性、意味、正義、秩序の、そして社會生活の計畫通りの組織化の究極的な勝利への絶對的信仰にかれは貫かれてゐる。このデモニーニッシュな社會的非合理主義と社會的汎論理主義との、すなわち、過去の厭世的な把握と未來に對する歡呼に満ちた信仰の意外な融合は、不思議な魔術の働きをするのである。明るい未來は避けることも免れることもできぬ天命として明にされるのである。自由の王國は決定的なものとして現われる。従つてマルクスの哲學は決して唯物論ではない。もしそれを唯物論というならば、それは術語の公然たる歪曲である。それはむしろ物活論であり、特殊の理想主義ともいへべきものである。

經濟的な唯物論は感動を惹き起すことはできない。それは科學的假設以上のものではない。感動はマルクスのメンアニズム的熱狂によつて喚起されたのであつて、それは究極的な表現をプロンタリアの歴史的課題と世界解放の使命という理念において見出しているのである。マルクス主義の世界觀の側面はしかし、科學と何等の關係も有してはいない。マルクスの言う「プロレタリア」と未來の社會主義的社會の幻は、不明瞭な事物の啓示であり、信仰の對像であり、宗教的理念である。

マルクスによれば、歴史的過程の基礎には單に經濟學が、すなわち、生産力の發展が——いかなる情熱をも喚起す

ることのできなす一つのテーゼが——存在しているばかりでなく、同時に階級闘争が存在しているのである。マルキシズムの全體的な激烈さは階級闘争の理念によつて生み出されるのである。この問題によつてわれわれはその價值論の結びついてゐるマルキシズムの主觀的側面にみれるのである。

マルクスにおいて階級の概念が價值論的意義を有していることには、何の疑いも存在しない。「プロレタリア」と「ブルジョア」の相異は、マルクスにおいては善惡の相異と一致するのである。マルクスは自らを無道德主義者であると信じていたが、かれの階級闘争説はしかし根本から道德的である。たとえかれの道德主義が獨特の消極的な性格を示してゐて、かれにとつて正、不正とか善、惡が存在しないとしても。

マルクスは原罪を認めた。それはかれが人間社會の形而上學的原理として把握したものであつた。到るところに一つの社會階級の他の社會階級による搾取という形をとつた人間の人間による搾取が存在している。「搾取」という概念にマルクスは純粹に經濟的な性格を與えようとし、これを勞働者より奪つて支配階級が自己のものとする剩餘價值の學說と聯關させたのである。しかし「搾取」というこの概念が決して純粹に經濟的な概念でなく、同時にまた倫理的な概念でもあることは明かである。

マルキシズムは決定論的見解の極端な形であらうとする。そしてすべての道德的價值評價や道德的自由を否認し非難する。がしかしマルキシズムの根柢には、人類の歴史に傳染し、すべての社會階級が感染し、すべての人間の宗教的見解やイデオロギイを歪曲する原罪の理念が横わつてゐる。搾取の罪は眞理認識の可能性を虚しくし、この罪を是認し主張することを求める虚偽の學說や見解を生み出すのである。

經濟的現實は人間の意識の中に、イデオロギイとして反映する。この根本的確信に導かれてマルクスは、必然的に人間の文化の歴史の中にその表現を見出してゐるあらゆるイデオロギイを見解とを幻影として把握するに至つたのである。ここでわれわれに明かとなるのは、マルクスとフロイドの親近性である。兩者はその課題を、意識の虚偽の活動、その

偽り、その無意識の偽瞞の別袂に見たのである。

別袂する者は自己自身を眞理の所有者と感じなければならぬ。マルクスはまた眞理の現われるべき歴史的时刻は到来したという信仰に満されていた。すなわち、あらゆる幻影を幻影として認識し、絶對的眞理を發見し、世界史の眞實の把握に對する鍵を見つけたことに成功したと思つていたのである。

眞理はかれにのみ自己を啓示するのである。というのは、マルクスにおいては自覺に到達し、眞理の認識を遂行するのは個人的人格ではなくて、人類を幾千年來の奴隸状態から解放すべき使命を有している社會階級だからである。プロレタリア意識の捲い手であるかれにおいて、人間認識の相對性は克服され、眞理はもはや經濟の反映では決してなく、絶對的眞理として立てられるのである。すべての他の社會階級は種々なる形の搾取の罪に感染して、そのため眞理から隔つていたのである。

プロレタリアは搾取の原罪に陥らぬように守られている唯一の階級である。かれらはあらゆる物質的財を作り出しそれによつて人間社會は生存しているのであるが、しかしかれらはあらゆる他の社會階級によつて搾取され壓迫されているのである。かれらは慘めさと資本への奴隸的な依存の中で露命をつなぐことを餘儀なくされている。というのは、かれらは一切の生産手段を剝奪されているからである。ところがプロレタリアの中には、資本主義社會の崩壞の後に明かとなるであろうところの新しい力が、すなわち、集團の力が熟しているのである。

プロレタリアは人類の解放の使命をもつメシア的階級である。それは眞實の人類と同義的であり、階級であることをやめる。それはもはや階級的な社會を後に残さないからである。プロレタリアには眞理が興えられており、正義の實現が委ねられているのである。――それはただその社會的状況の結果としてではあるが。

プロレタリアのメシア的觀念は二重の要素をもつている。壓迫されたものの解放、社會正義の實現とともに、社會的合理化的勝利、世界の非合理的エネルギーの究極的克服がそれである。しかしマルクスの言う「プロレタリア」が

現實に存在している實際の社會階級でないことは明かである。それは理念であり、神話である。

プロレタリアのメシア的使命というマルクスの理論の決定的な特色は、神の選民の特質をプロレタリアに移した點にある。マルクスは父祖の教えからは離れたが、メシア的希望をその心の奥底に持ち續けているユダヤ人であつた。マルクスのメシア的希望は新しい目標を見出した。プロレタリアはかれにとつて新しいイスラエル、神の選民、地上における未來の王國の解放者であり形成者となつた。マルクスのプロレタリア・コミニズムは、古きイスラエルの世俗化された千年王國説である。學問的な道において、プロレタリアの歴史的使命のこの把握に到達することは不可能である。われわれはこの點で、共產主義という宗教の中心點をなす宗教的現象に觸れるのである。

メシア意識は古きイスラエルの遺産であつて、ギリシヤの思考はこれと無縁に止つてゐる。ロシアのメシア意識はその起源を聖誓のメシアニズムにもつてゐる。メシアニズム的感情や意識は、強力なエネルギーを喚起するのである。それは感動と熱狂と献身をもつて滿たすのである。この理念に社會主義的勞働運動も控われている。共產主義者は世界のカタストロフが始まつており、世界史の新しい時代が迫つてゐるといふ信仰をもつて、生活し創造してゐるのである。この信仰はかれらに超人的なエネルギーを與え、かれらを驚くべき活動にまで奮い立たせるのである。資本主義社會の崩壞に關するマルキシズムの理論は、迫りつゝある最後の審判の信仰である。すなわち、時は滿ち、時間的な出來事は超時間的なものによつて突破されるのである。終末論的要素は共產主義の世界觀を貫いてゐる。

ロシア革命においては、二つのメシア主義的潮流が出逢つて結合したのである。すなわち、プロレタリアのメシアニズムとロシア國民のメシアニズムとが結合したのである。ロシア國民はその際プロレタリアと謂わば同一化された。實際には何の親近性も示してはいないのであるが。

さて以上が、「宗教的メシアニズムとしてのマルキシズム」といふ項目においてベルヂアエフの解明したマルキシズムの根本構造であるが、われわれはこの根本構造より結果するマルキシズムの宗教理解とその批判について明かに

しておきたい。それについては「マルクス主義と宗教」に詳細に論ぜられているので、暫くそれに従つて考察してみよう。

マルクスは熱烈な無神論者であつた。かれは宗教に無關心な人々と同一視されることはできない。かれは力をつくして自己の無神論に哲學的科學的根據を與えようとした。この傾向は獨創的なものではなく、かれはこれを「キリスト教の本質」の著者フォイエルバッハから借用してきた。フォイエルバッハはヘーゲル左派に屬し、この人においてドイツ觀念論は唯物論に移行したのである。われわれは宗教の人間學的理論をかれに負うのである。

人間はその本性を、その最も高尚な願望と憧れとを、神に歸する。人間は自己を外部に投射し、自己の像、自己の姿に似せて神を作る。フォイエルバッハは言う「貧しい人間が富める神を所有する」と。宗教は生を幻想的な領域につれ込む。人間はその慾望を地上においては實際に實現する可能性をもたないために、それが別の世界、すなわち、天上において實現されるように想像するのである。

フォイエルバッハは十九世紀のヨーロッパ哲學において、無神論の最も偉大な代表者であつた。マルクスはこの宗教觀を社會生活に適用した。かれの初期の勞作の一つたる「ヘーゲル哲學批判序説」において、かれはその宗教の定義を與えた。曰く「宗教は民衆の阿片である」と。勞働者階級と人類とを解放するために、マルクスはあらゆる宗教的信仰の軛を振り落すことの必要を主張した。宗教は人間の解放、その權力、その神社の實現にとつて障害である。それは人工の善によつて人間を奴隸化し、その意識を幻想の力に縛りつける。それは人間の現實の不幸を反映し、人間に空想上の幸福を與える。眞の幸福を得るためには、妄想に過ぎないもの、すなわち、宗教的虛妄から解放される必要がある。宗教は人間の無能の表現であり、それは人間が力を得ようとして進んでゆくときの桎梏である。それが民衆の阿片である所以はここにある。

宗教はまた人間の間による、階級の階級による搾取の道具である。神を至高の主として提示することによつて、

宗教は人間社會に權力の觀念を反映し、正當化する。それは壓迫され、奴隸化され、貧しく、勤勞している階級がその迫害者に對して反抗することを許さず、その諦めの代償として天國における報酬を約束する。宗教は常に現存する惡、不正、人間の現實の不幸を是認し、ただ天上の幸福の可能性に對する希望のみ賜える。個人を搾取する支配階級は、その社會的利益に促されて、貧しく壓迫された不幸な人間が根氣よくその運命に耐えなければならぬと命じる。宗教的信仰を支持するのである。

かくしてマルキシズムは幻想的幸福としての宗教を揚棄するために、民衆が幻想的幸福を必要とせぬ世界を建設するため、この涙の谷の政治的批判を行い、その變革を企てるのである。そしてその根本思想であるイデオロギー論に則して、現實の矛盾の解決に伴う人間の自己疎外の解消は、そのまゝ意識に反映して宗教そのものの解消を歸結すると主張するのである。

それではこのようなマルキシズムの根本思想に對して、そしてそれに連る宗教批判に對してベルチアエフはいかなる批判を行うのであろうか。われわれはそれを「共產主義の眞理と虚偽」の中の「Pro et contra」の項を中心とし「マルクス主義と宗教」及び「精神の國とケーザルの國」の中の「マルクス主義の矛盾」の項によつて精いつつ紹介してみたいと思う。

四

扱て、コンミニニズムは簡単に肯定も否定もできない複雑な現象である。それは多くの眞理とともに虚偽を有している。それではコンミニニズムの眞理は何かというに、それには消極的眞理と積極的眞理の二つのものが分たれる。消極的眞理はブルジョアの資本主義的文明のあらゆる虚偽、あらゆる矛盾と病氣の批判と、ブルジョアの社會秩序の利益に順應せる墮落した偽りの腐敗キリスト教の漸罪のうちに存在する。そして計畫經濟と經濟的社會的生活との統

制への意志の中には積極的な眞理が含まれている。

しかしコンミニニズムの中には根本的な虚偽が潜んでいる。すなわち、その根本思想である唯物史観は、一つの矛盾を示している、そのために受け容れ難いものである。マルクスはあらゆるイデオロギーが経済的諸關係の反映であると考へ、今日に至るまで存在する一切のイデオロギー、一切の哲學說、一切の宗教的信仰の幻想的であくまでも功利的な性格を暴露する。そこで極めて自然に次の疑問が起つてくる。一體マルクスのイデオロギーとマルキシズムの理論とは何であるのか。マルクスの史的唯物論そのものも十九世紀中葉のヨーロッパの經濟的諸關係の一つの反映ではないのか。この疑問は、哲學的見地からすると、マルキシズムにとつて致命的なものである。なぜならば、もし歴史の唯物論的解釋をマルクスのイデオロギーにも適用するならば、それは他の一切のイデオロギーと同様に、幻想的で反射的な虚偽のものとなるからである。一般に認められる哲學的用語法によれば、マルキシズムは相對主義であるが、マルクスは歴史的過程の神祕を暴露したと信じ、マルクスとマルクス主義者はひとり彼等のみが護持すべき一つの絶對的眞理の啓示者たるを自負している。しかしこの疑問に對する應答がいかなるものであれ、史的唯物論の理論はその内面的矛盾のゆゑにその基底を失うのである。

またマルクスは社會的正義と眞理の觀念から發した倫理的社會主義をブルジョア的と考へて蔑視した。マルクスの社會主義は不可欠な社會過程の、物質的生産力の發展の結果であるし、それは經濟的必然性によつて生れるものである。マルクスによれば、社會主義は正しい。というのは、これが善であるとか、道徳的義務であるからというのではなく、専らそれが經濟的過程の未來の段階だからである。マルクスは必然の前に屈服した。かれは理論の上では聞然するとどこなき無道徳家であり、殘惡、不正、眞理虚偽の區別に對して何ら關心を示さない。マルキシズムの理論は、道徳的評價や憤激に、また正、不正の區別にさえ、存在の餘地を許すものではない。しかるにマルクスとマルクス主義者は社會的不義に對する憤激に滿され、極惡の擄取者ブルジョアジーに對して嚴しく斷罪する。しかしこうし

た憎悪はいかなる権利と理由とを有するのであるか。

マルクス主義は、理論的に言うと、判るところに一階級による他階級の搾取を認め、そして意識と觀念の中にその結果を見出すのである。マルキシズムの中に科學的觀點と道德的觀點が現われるのは實にここである。搾取は道德的に咎むべき現象である。それは決して經濟的な現象ではない。しかるにマルクスは道德的現象と經濟的現象とを全く混同している。かれにとつて、搾取は不可欠な經濟的過程の一結果である。マルクスの觀點からすれば、搾取が道德的憤激をかき立てるとは了解するのに困難である。ところがマルクスには道德的教説があつたのである。かれの倫理は最大の善が最大の惡によつて實現されるであらうという原理、光明は暗黒の凝集より生れるであらうという原理から出發している。資本主義の惡は増すべきであり、勞働者の境涯は悪化すべきであり、勞働者は激昂すべきである。さらば惡は破壊され、社會主義の善は現われるであらう。勞働者の邪惡な本能から、怨恨、憎惡、報復欲、暴行から、完全な正當な優良な社會制度が生れ出るべきである。マルキシズムは一つのネーティブアの信仰に動かされている。それは資本主義社會における搾取の罪と惡とが社會的過程によつて、惡の増加によつて克服されることを信じている。しかしマルキシズムはいづこにも善の、眞理の萌芽を見ず、精神的な光明を認めないのである。

そしてこの精神の原理は共產主義の大いなる虚偽を形造るものであるが、その根源はその神なきことにあるのである。ここに全體の禍の源がある。神なきことは生のすべての領域において報復せずにはおかない。それは共產主義者の非人間性を作り出す。神の否認は人間自體の否認へと變つてゆく。共產主義者は人間の名において神を否認するのではなく、第三の原理、すなわち、社會集團という新しい神性の名において神を否認するのである。

人間人格の否認は共產主義のキリスト教とその中心理念に對する戦いと深い内的關係を有している。キリスト教には神人の神話が根本に横わつてゐる。そしてそれは人間人格の價値と地位がまた結びついているキリスト教の神秘的眞理にかかわるものである。この神話の中心に満ち充ちたる智慧が秘められており、その中に人間生活のあらゆる葛

藤と刺戟を明かにし且つ解決する力もまた含まれていたのである。しかるにこのキリスト教の教説は人間の本性の罪のゆえに、人間によつて十分展開されず且つまた眞實に生活の中に實現されなかつた。そしてこの文化の地盤の上に人間中心主義の發生するのを止めることができず、遂に神人の神話の破壊をもたらししたのである。

最初神話の半分が、すなわち、キリスト教の神の理念が攻撃された。神話の他の半分、すなわち、キリスト教の人間の理念は初めは手を觸れられないで残された。キリスト教の神話の破壊のこの段階は、フオイエルバツハの大きいなる力によつて表現されたのである。フオイエルバツハは神を否認し、神學を人間學と取り替え、人間に神の性質を賦與した。聖書の眞理を逆にして、フオイエルバツハは、人間が神を自己の姿に似せて創つたと教えたのである。人間についてのキリスト教の神話は、フオイエルバツハの學說の中に入つていつた。かれの哲學は神を喪つていたが、人間を喪つてはいなかつた。そしてその哲學がキリスト教に根源をもつてゐることは救うべくもなかつた。

マルクスはフオイエルバツハの哲學から出發した。そしてフオイエルバツハの無神論の全體の議論を自分のものとした。かれはキリスト教の神人の神話の破壊を深め、そして神性としての人間へのフオイエルバツハ的信仰を喪つた。かれは人間中心主義は全然説かないで、社會中心主義、或はプロレタリア中心主義を説いた。神の形や神の似姿は人間の像から消えて行つた。マルクスにとつて人間は社會の似姿となつた。徹底的に人間は社會環境の、その時代の經濟の、自己の屬する階級の作り出すものとなつた。人間は社會の一つの機能に變つた。この人間人格の否定は神の否認の究極の結果である。そして共產主義のあらゆる否定的側面はこの源より發するものである。生ける神の否認は社會的偶像崇拜へと急變した。共產主義は社會集團という偶像の崇拜を示してゐるのである。

扱て、共產主義の無神性と非人間性は、そのあらゆる非眞理の根源である。すなわち、それは社會正義の實現を計るための慘忍な強制の根源であり、それはかれらが唯一最高の人間生活の目的と考へ、そしてその隷屬者に押しつけようとするその目的の實現のためには、あらゆる道が是認されるといふ考への根源であり、完全なる生活と一般的な

人間の同胞化の實現の手段として、共產主義によつて呼び出され養われる憎悪と報復と不和の根源である。

しかし事態をここに至らしめたマルキストの良心は、資本主義と技術的進歩によつて害ねられているのである。生の機械化、人間の人格の廢棄、これを唯物的進歩の用具と化したこと、精神性の脆弱化、こうしたことは資本主義の中に、十九世紀の技術文明の中に、すでに始まつていた。惡の起因を求めるべきであるなら、マルキンズムの中に求めるべきではない。なぜなら、その神と人との否定にないてマルキンズムは決して獨創性を示しているのではなく、マルキンズムはこれらすべてをその敵に借りたのであるから。十九世紀資本主義社會に復歸することによつて、神に對する信仰を保持し、人間精神の自由と人格の絶對的價値とを保全しようと望むのは、自分の行つてゐることの意味を悟らない人々である。もしかれらが意識して惡意から動いてゐるのでないならば、少くとも幻想に、致命的な誤謬に、支配されてゐるのである。

さてそれでは、反宗教的なマルキンズムと戰うにはいかにすべきであらうか。それにはキリスト教を資本主義の利害とブルジョア社會制度とに結びつけてゐる紐帶、キリスト教的信仰の歪曲と頽廢、その一時的な人間の利害への苟合を指示する紐帶を打破することが必要である。キリスト者は、誠實な無神論者の憤激がしばしば正當な理由を有つてゐることを公然と認めなければならぬ。未來は勤勞と勞働者階級のものである。社會主義に向う一般的风潮はたしかに存在する。

社會革命を企てるために、資本主義とブルジョア階級の精神化の必要から論を起して、キリスト教的觀點から社會問題を提示するといふことは、今日ではもはや時機を失してゐる。その時はすでに終つてゐるのだ。現代は社會主義と勞働者階級の精神化の必要から出發して、キリスト教的觀點から社會問題を提起しなればならない時になつてゐる。キリスト教はプロレタリアが卑しめられ、壓迫せられ、苦しめられていたとき、これに救助の手を伸べることが餘りに少かつた。今それが勝ち誇り、他を壓迫しようとするとき、キリスト教は精神的にこれを救ふ必要がある。も

しプロレタリアが敗北のときにおいて精神的に脆弱であるとすれば、況んや凱歌をあげ、勝利を得、権力を獲得した日には、プロレタリアははかり知れぬほど精神的な弱さを増すからである。なぜならプロレタリアが墮落する危険にさらされるのは、その獨裁の日、それがメンシエフ的觀念を實現する日においてであるからである。社會問題は労働者の革命運動が勝利を収める時期において、特に宗教的精神的問題となる。教會は社會的眞理の研究を純化し、これをキリストの眞理と協調せしめるために力を盡すことができる。

マルクス主義唯物論は虚偽である。なぜなら、神は存在し、觀念はそれ自身によつては無力だからである。キリスト教的思惟は、精神的空虚、共產主義的理想の空虚、共產主義革命が新しき世、新しき人間を創造する能力無きことを暴露するよう求められている。キリスト教は共產主義よりも更に急進的である。それは神の國を、人間と世界との絶對的變貌を、新しき天と新しき地を求め、人が無信仰者の合言葉、すなわち「宗教は搾取の用具である」を論駁しうるのは、ただ宗教の辯護者や奉仕者が特殊の利害のために用具として仕へることを絶對にしないという條件にある。

キリスト教を保護するためには新しい方法がどうしても必要である。なぜなら、舊い方法はそれに累を及ぼしたからである。純化され、靈化され、深化されて、文化と社會生活におけるその創造的業務の意義を有するキリスト教のみが、反キリスト教的精神を克服するであろう。

以上がベルジャエフの共產主義の根本思想とその宗教理解に對する批判の大要である。ベルジャエフ自身のコミニズムの理解の仕方について種々の異論も當然出るであろうが、この小論においてはただベルジャエフの思想の紹介に筆を止めておきたいと思う。